

Trial & Error

トリアル・アンド・エラー

No.56



特集 海外の現場と国内活動

1月12日 サッカー大会

| | |
|--|----|
| われわれの憲法 | 2 |
| 座談会 海外の現場を支える国内活動 | 3 |
| “古本リサイクルフェア ‘85 を終えて” — 萩原喜之さんに聞く | 10 |
| 私たちは始まるまで待てない | 12 |
| 「同じアジア人のことをもっと知ってください」 | 14 |
| 陸の孤島カンブチア — 傷ついた微笑の国 | 16 |
| 手作りの機関誌『そんぼっと』 | 18 |
| レストラン探訪 アンコル・トム | 19 |
| Dear, My Friend | 20 |

われわれの憲法

栗野 鳳

「なぜ他国の人びとに援助の手をさし伸べるのか」と質問されることがある。それに対して、「ヒューマンズムうんぬん」といった説明をしたところで、欧米人であればともかく、相手（質問者）は容易に納得しない。だいいち、そういう言い方は、こちらも何となく気恥かしいものである。国際社会や国際関係が相互依存的になっていること、「南北問題」の解決が急務であること、そして何よりも、対象となる人びとが基本的に人間として必要とするもの（こと）を持っており、それに対応することが当該国（政府）にとっても当人にとっても極めて困難であること、などを説明しても、答えとして十分でない。そのような説明は対象の側についてのもので、われわれ（援助する側）の状況・考え方・理念・動機などの説明にはならないからである。

実は、われわれには「憲法」がある。それも、私的なものでなく、日本国憲法のことである。その規定の中に、答えとして適当なものがある。憲法前文2項の末尾に次のような文章がある。

「われらは、全世界の国民（注＝ピープルズ）が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する」。

この文章が冒頭の質問に対する答え、あるいは答えの内容となる理念などを与えていると理解するか否かは、このような権利（注＝憲法学者は「平和的生存権」と呼んでいる）を有すること——もとより他国の人びとも——を「確認する」ことが、どのような意味か、どのような行為まで含んでいるとするか、にかかっている。

「恐怖と欠乏から免かれ平和のうちに生存する」ことが困難な状態に陥っている人びとは、前記の基本的に人間として必要とするものが満たされていない。そのような人びとが、その状態を脱し「平和的生存権」を再び確保しうるようにする——それこそが援助である。われわれがこの点で努力することが、「確認する」ことに他ならない。換言すれば、それこそが日本国憲法が国民に要請していることの一部——重要な一部——であると理解される。

（元カンブチア大使 JVC執行委員）



*今号より本誌ではカンボジアの呼称を改め、「カンブチア」を使用いたします。カンブチアはカンパー（伝説上の建国者）のチア（子孫）という意で、原音に近いものです。なおクメールは民族名でカンブチアの国民と必ずしも一致しません。

海外の現場を支える国内活動



吉川 健治^{SVA} (曹洞宗ボランティア会) 柴田 久史 JVC

笹尾 正乃^{CYR} (幼い難民を考える会) 森山 久寿子 JVC

内田 和夫 シャプラニール 前川 昌代^{T/E} 編集部

難しい他団体との交流

前川 今日お集まりいただいた皆さんはそれぞれ海外に現場を持ち、それを支える国内活動も抱えています。国際協力とか難民救援は海外が主体となりますが、それも国内での支援がなければ続けることはできません。ところがこれがなかなか難しく、私もJVCも国内活動をいかにして活性化すべきかと悩んでいます。同じような経験を持っている皆さんに日ごろ心がけていらっしゃるなどをお聞かせいただけたらと思います。

ここにお集まりの皆さんはふだんから顔を会わせることも多いし、個人的にはおつきあいもあるのですが、なかなかいっしょに活動することは少ないですね。活動がタコソボ化することは避けたいと思っていますが、他団体との交流などはどのようにされていますか。SVA(曹洞宗ボランティア会)は12月3日の夕刊(朝日新聞)に「おはなしきゃらばん」^{注1)}のことが載っていましたね。この運動に参加されることになったきっかけは何だったのでしょうか。

吉川 タイのコンケン大学の図書館学科の先生に「おはなしきゃらばん」のことを聞かれるまで実は僕たちもよく知りませんでした。英語の雑誌で調べて東京で搜したのです。

笹尾 私たちのやっていることも国内での様々な活動とその方向は違っていても結びつくことはできるのですね。以外と目ざしているものは変わらないのかもしれない。

吉川 そうなんです。会って話をしてみると、われわれの動きとキャラバンは活動は違うのですが、本質的には同じですね。

笹尾 うちのカンプチア難民の子供たちの幼児教育をやっていますが、私たちと連携できる国内の団体とかグループの情報をもっと得られたらと思います。でも現実にはなかなかできないですね。

注1) 国内各地に児童文庫を設け、巡回おはなし会として読みきかせや人形劇の実演を行っている。SVAはタイで「おはなしきゃらばん」に参加。

吉川 そうですね。活動上のネットワークってないですね。

森山 実際に同じ目標とか具体的なものでもない限り、わかっていてもなかなかできない。やっぱり人数が限られてつなぎになる人が少ないということが限界になっているようです。

国内活動とは人材を確保すること

柴田 CYRからJVCのソマリアのプロジェクトに出向する可能性なんてありますか。

笹尾 私たちの希望としてはそこまでは考えていません。うちのタイの活動にも本当は5人必要なんですけど、3人確保するのがやっとなんです。

柴田 保母さんがそんなに少ないの。

笹尾 ええ、保母さんで英語のわかる人はあまりいないのです。だから保母の資格のある人ではなくて、子供が好きで理解している人として募集しています。

柴田 日本人にとっては英語力と保母というのは2つの技術なわけで、それはとても難しい。

笹尾 単なる技術訓練だと話すことばも決まっているのですが、保育の場合は保育園の中を想像していただければわかるように、こと細かなこと、たとえば子供に対し保母さんが悩んでいるんじゃないとか、いろいろな気配りが必要なわけですね。そのコミュニケーションを英語でしなければならぬので、語学力は非常に大きなウェイトを占めます。

このように海外で働く条件は厳しくて、誰でも行けるわけではありません。逆にみんなが行って、国内を支える人がいなくなっても困ります。私自身まだカオイダンキャンプに行っていないのです。海外で働く人を送り出す側において、その人たちが仕事のできるだけの財政的なものを確保するとか、国内での基盤を作るなどの仕事も当然必要です。そういう意味で国内での仕事はもちろんあります。

吉川 国内活動の問題はまず人材確保ですね。うちでも年に3回人材募集して、問合せはその度に100件ぐらいあります。その内履歴書を送ってきたのが40~50件。そして派遣が決まったのは3名です。うちの場合も資格は問わず、教育文化に関心がある人ということで募集していますから窓口は広いです。ただし中学生程度の英語は必要ですが。

中にはとても積極的に熱意のある人が来まして、その作文の最後に「僕の夢を叶えて下さい」とあるのです。その気持はとてもよくわかるのですが、現実にはそれを抱えこめる器も内容も僕たちにはないのですね。こちら側としては難民問題と自分たちのかかわりなどをじっくり学んだ上で参加してもらいたいのですが、なかなか納得してもらえなくて…。ですからその熱意をどのように吸収したらいいのかと悩みます。その中でも僕たちの考えをわかってくれて、会員になってくれる人もいます。そういう人はしばらくして現地に行きたいと思えば行くこともできるし。理想としては国内活動をやりたいという人の中からいいものをつかんで現場に行ってくれたらなと思います。

笹尾 うちには条件が多いのである新聞に「よほどの決意がなければ行けません」などと書かれたり、女性がやっている団体なので女性でなければ参加できないように思われていますが、別に男性を嫌っているわけではないんですよ。保育というどうしても女の分野と思われがちですが、主旨に参同して下さった方は誰でも受け入れます。

吉川 うちの場合もずいぶん誤解されています。団体の名称に曹洞宗という名前が付いているのでお経が読めなければいけないんじゃないかとか、国内活動という布教活動をやらされるんじゃないかとか。

笹尾 さっき吉川さんが言ってらしたけれど、うちにも赤ちゃんを抱えて、「私にも何かできないか」と飛び込んでくる人がいます。その熱意を私たち事務局がいつでも受け入れることができる余力や体制がないのがとても歯がゆく思います。だから問合せに対しては一つ一つ必ず返事を書き、都内の人には事務所に来てもらうようにしています。ただ地方には支部もないし、どのようにアプローチしていったらいいのか、それが課題です。

会員とは、会費とは、

柴田 こういう運動を長くやっていると疲れてし

まうようですが、会員の入れ替えなんかも多いですか。

笹尾 会ができたばかりの80年ごろ入会した人は定着していますが、インドシナ難民がブームになった82~83年ごろ入会した人は余り残っていませんね。CYRの資金は大口の助成金や他の国の団体からの援助もないので、一人一人の会員の寄付に頼るしかありません。あとは春、秋のバザーですが、SVAのように地方支部がありませんので私たちが主催します。ボランティアの人が100人、品物は全国から300件ぐらい来ます。初めての人もいるし、毎年送って下さる人もいるし、それだけでつながっている人もいます。

柴田 会員は今どのぐらいですか。

吉川 うちでは600人ぐらいです。

笹尾 うちも同じぐらいです。

森山 ジャブラニールは300人だったと思います。

前川 JVCも900人ぐらいですが、なかなかこの数字は変わりませんね。

吉川 うちは一昨年未だに400人で、昨年は900人にしようと目標をたてたのですが現在は600人です。それも可能性のあるところに当たっていったので、今後飛躍的に増える見込みはありません。

森山 会員はどうやって募集していますか。

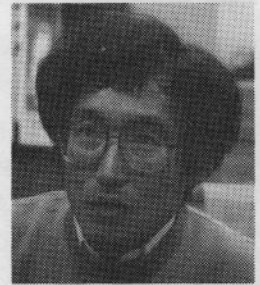
吉川 機関誌以外だと個別に手紙を書いたりしています。

森山 JVCではよく地方に講演に行きますが、それによって会員が増えたという話はあまり聞きませんね。

吉川 うちでは現場からボランティアが帰ってくると、それぞれの故郷でカンブチアやラオスの難民はこういうことをしているんだと話をします。それで必ず地元の新聞社に取材してもらおうようになっています。すると以後その記者とつながりができるし、「タイから東京事務所にレポートを送ります」というようにして地方とつながりを持つようにしています。

柴田 それはおもしろいですね。日本では甲子園のように自分の地域から出ていった人には関心がありますからね。

吉川 はい一度新聞に載ってしまうと、近所の人



内田和夫さん



も注目してくれます。

内田 こんばんわ、すいません遅くなってしまっ
て。

笹尾 今国内活動について話しているんですが、
シャプラニールが13年も続けてきたその基盤はどの
辺にあるんでしょうか。

(内田さんは今までの話の説明を受ける)

内田 僕たちの活動に細々とも関係を持ってくれ
ている人は、ただの市民がやっているということが
気に入ってるみたいで、「僕もやれるかもしれない」
という感じがあるようです。でもその熱意や負担が
その人自身が成長したり、生活に広がったりするよ
うな点でお返しできていないなとは感じています。
もう一つ感じていることは、活動を長くやっていると
プロ化してくるところがあり、初めて参加する人にと
っては意識として三段ぐらい飛びこえるようなと
ころがあります。もっとそのような新しい人たちと
の出会いを大切に、新しい関係を作ることによっ
て運動の中身を豊かにしていく。そのような形で出
会っていくことが会員を増やしていくことにつなが
るんじゃないかと思います。

構造的なことをいえばスタッフの給料とプロジェ
クト費を除いた基礎的な維持費については会費で賅
うのが組織として健全だと思います。そうしないと
プロジェクトが切られるような状況になった時ちょ
っともたないんじゃないでしょうか。今は中心メン
バーの財政問題の負担が大きくて、活動費の大半を
稼いでいるという意識になってしまい、会員をどう
しても軽視しがちです。それに活動が落ちこんだ時
に「自分たちが支えてきた」という意識も強く、四
六時中生活をかけてかかわれないという人をはねの
けてしまうところがあります。だから僕らの会費の
1万2000円という額は決して軽いものではないの
ですが、その重さも考えてほしいと思います。

これは話が少し飛びますが、フランスの人権宣言
に「税金を納めるのは権利だ」というのがあるん
ですよ。それは社会契約に基いて自分たちの権利
であるはずなんです。だから会費の観念も払わな
ければいけないというものではなくて、もっと積
極的なイメージに転換できないかなと思います。

森山 それはとてもよくわかります。国内のプロ
ジェクトの発想はそうでした。みんなが必要だから
スタッフも置き、活動費も集めましょうって。でも
実際はお金が集まらなくてドナーからもらった。そ
の時の仲間はよくわかっているのだけれど、あとか

ら来た人たちはもうできた
組織から仕事をいただく
というようになって、自分が
支えているという発想には
なりにくいんです。

内田 その解決には二つ
しかないと思います。一つ
は一人一人が生々した活動
をしていくための場を作っていくことと、もう一つ
は活動の全体の方向性を理解し、その中で自分の活
動がどこに続いているのかということを理解してい
く。そうでなければボランティアが部分的に自分の
やりたいことをやっているだけで、それが全体的に
どんな意味があるのかわからない。自分のやって
いることの社会的な意味を押さえ、あえてそのこと
をやっているという社会的責任を負っていくことだ
ろうと思います。そうすると余計なことも引き受
けるし、しんどいこともあるでしょうが、そういう
ことをわかっていくような場なり機会なりを提供
していかなければ、今言ったことを理屈でいって
もわかりません。

吉川 前に『社会福祉事典』で“ボランティア”
を調べたんです。“ボランティア活動”として載
っていたのですが、「自分たちの所属する社会をよ
くしようと思う市民が集まって連帯していこうと
する活動」だと。そうすると今おっしゃった
みたい会員組織であれば、会員一人一人がその
組織をよくしていくという意識がなければなら
ないのです。ところが意識の差や考え方の違
いが会員が増えれば増えるほど出てくるわけ
です。それでは会員とは何だろうということ
になってきます。僕も会費で運営費を賅って、
募金は直接プロジェクト費として使いたい
と希望しているのですが、なかなかそこま
ではいってません。だから会員の人が「あ
っ、これがあれば自分たちの社会はもっと良
くなるんじゃないか」というような確信の持
てるものを提供していかなければ運動にはな
っていかないんじゃないでしょうか。

シャプラニールの歴史から学ぶ

森山 トヨタ財団からシャプラニールの本が
でますね。

内田 初めは『シャプラニール10年史』だ
ったのですが、長びいてしまって『シャプラ
ニール12年史』になってしまいました。

うちも最初は緊急救援から入って、バン
グラーデシ



ユの独立戦争のころは一種のブームでしたから渋谷の歩行者天国で街頭募金なんかしていたようです。初期のメンバーは現地の人といっしょに農業などをやっていたのですが、2～3年もすると活動が下火になり、もっとちゃんとした組織を作ってジュートを輸入したり、会報なども出して、情宣もしっかりやっていたという案が出てきたようです。ところが当時は自分の生き方を問うということが強くて、内部のせめぎあいがあり、組織的に内側に内側に入りこんでいきました。そしてメンバーも次第に減っていき、残ったメンバーの手弁当で運動を維持していきました。そのころ援助の流れが緊急なものから開発へと変化していき、コミユラという村に駐在員を2名送っていました。ところがそれが村の有力者ににらまれて、襲撃を受けるということがあり、その経験から直接僕らがフィールドに入ることはやめました。そして日本人は現地のワーカーをコーディネイトしてやっていくという形ができました。一時組織が細ってきた時は活動資金にも事欠くこともありました。現在では欧米からダッカに直接資金をもらえますし、工芸品もこのごろは売り上げが伸びてきています。

問題はやはり会費収入の割合が低いことですね。今までどうやって会員が増えてきたのかというと、口コミなどで伝え聞いて積極的にかかわってきた人ばかりで、こちら側から働きかけたことはないんです。会員は正確には賛助会員で、規約がないから勧誘しにくいということもありますが。

バザーと勉強会

柴田 国内ではどんなことを具体的にやっていますか。勉強会とかいろいろあると思いますが。

吉川 実質はそんなにありませんね。カンボジア・カルチャー・クラブ(CCC)というのがありますが、あれは東京近郊の、それもカンブチア人主体の組織ですから日本人は事務をするぐらいで実質的にはほとんどないといってもいいです。

笹尾 まだ始まったばかりですが、会員同士の交流会というのがあります。月に一回講師を呼んで講演会をやったり、現地から帰ってきた人の帰国報告会などをやっています。国内活動とはどれだけそ

の組織を一般の人々に浸透させ、認知してもらおうかという広報活動につけるのではないのでしょうか。

柴田 そうですね。それから資金集めも重要な国内活動ですね。

吉川 うちの資金源は寄付以外だと主に会費と古着のバザーなどです。この活動は地方が中心で、東京では収納場所がないことなどからやっていません。

前川 キャンペーン中は事務局から誰か行くのですか。

吉川 ほとんど行きません。地方の人たちが各自で組織してやっています。“たんすの整理”でないことを説明し、送料を添えてもらっています。中には「古着まで出してその上送料まで付けるのか」という人もいますが、送るには送料もかかるし、僕たちが難民に衣服を送るということをその人に代わってやっているのだと説明しています。

前川 バザーにも古着を出しますか。

吉川 はい。これも地方単位でやっています。古着の他に難民キャンプで作られたハンディクラフトも売ります。将来は事務局の運営費もそういうものから出したいと思っています。でも今は販売に収益をあげるというより山岳民族の文化紹介というところですが…。

柴田 ジャバラニールでは勉強会をよくやっていますね。

内田 僕たちスタッフの勉強の場と、一般会員の勉強とか日ごろ感じている問題を話し合う場が必要なのです。それとちょっと事務局に顔を出した人が出られる場。この四つの必要性が勉強会にはあります。

森山 いろいろな要素が多くて、消化不良をおこしませんか。

内田 ですから突然やってきた人が勉強会に参加しても、その時たまたまダッカのプロジェクトの話を向こうと駐在員を交えてやるでしょ。そうするとチンパンカンブン。その場合は事前に基礎知識のパンフレットを作るとかすればいいんでしょうが、今は新しく入ってきた人に何をやっているのか提示するものがありません。専従は日常の仕事がととも忙しいので、今年はその周辺で活動についてよく解り、説明できる人たちを増やしていきたいと思っています。月4回の勉強会の内2回はバングラデシュの活動についてやっていますが、今年もっと会員全体理解しておいた方がいいというものを織りこんでいきたいと思います。ただ勉強会に熱心な学生たちと

昼間値札付などに来てくれるボランティアの人たちとの間が分離してきた点が気になります。そういうボランティアのための勉強会をどうやっていくかが目下の課題です。

勉強会は現在独自の委員会で行っています。僕たちは会員以外にも独自の名簿を持っていて、100人ぐらいの「あの人は来るよ」というリストがあります。恒常的にそれらの人に通信も出しています。また事業部は事業部で手伝ってくれる人のグループを抱えています。

奈良の村で国際交流

柴田 国内のボランティアはみんなで集まってお互いの顔も見えるし、海外とは全然人間関係が違う。ところがそこから海外の勉強をしましょうと言われても想像力だけだし、だから僕たちの活動も情報の少ない地方なんかには伝えるのは難しいです。

吉川 実はうちのタイ人スタッフが日本に10日ほど来ていました。そして奈良県のある村に行った。村に行ったらびっくりしたんです。日本とは東京みたいな所だと思っていましたから。その村の人も驚いた。おそらくタイ人が村に来るなんて初めてですからどうやって歓迎したらいいのかわからない。柿が珍しいといえば柿を取ってきてあげるなど非常に素朴なもてなしをしたのです。そうしたらそのタイの人はとても喜んで「忘れられない。忘れられない」というんです。また村の人にとっても「タイ人ってこんな人だったのか」と世界が広がったわけです。このことは村にとっては事件だったと思いますよ。

ですからタイの高校生や学生を日本の地方に呼んできて交換できたらいいと思います。実際にタイ人がその村の人たちと交流すれば、「あの人たちにも自分たちと同じような社会があるんだな」と頭でなく体験的に気づく。すると「オレたちの村も良くなりたいけど、あの人はいい人だからあの人の村も良くなってほしい」というようになるんじゃないか。

前川 どうしてその村を選んだのですか。

吉川 そのタイ人を京都、奈良に案内しようと思いついて、それなら理事のいる村にも行こうと。ただで泊まれるし。だからこんな結果になるうとは予想していませんでした。それなのにこの村のことが一番印象的だったのですね。

内田 鹿児島島の鹿屋を中心に“からいも交流”というのがありますね。あそこは昨年夏から交流先をタイにしぼってきて、農家に民泊していこうとし

ています。

森山 『朝日ジャーナル』に出ていましたね。初めはクワを送ろうとしていたのですが、最近では本当に彼らのほしい物ということで千羽せんぱ扱きを送ったというものです。

内田 農具を送ったり、あるいは向こうのプロジェクトに援助してもいいけれど、物がなくては続かないというのではよくないんじゃないでしょうか。

吉川 うちではカンブチア人との交流会を毎年やっています。バス旅行ですが、昨年で5回目になりました。

柴田 CYRには保母さんがいるから子供たちの面倒は見てもらって、今年は具体的にみんなでいっしょに出かけるというような企画をたてたいですね。

森山 ベトナムの子供たちには親のない子も多く、家庭の味を知りません。週末だけでも受け入れてくれる家庭があるといいと思います。

吉川 何かあれば子供たちが行けるというような家庭ですね。

違う土俵の上で対等の関係をつくる

笹尾 私は以前は福祉関係の仕事をやっていたのですが、ボランティア活動に長く携わっていると、福祉の対象者とか難民のことをやっているという意識が先に立ってしまっていて、自分たちはこんなに彼らのことを理解し、実践しているのに市民がついてこないというようなことがあるんじゃないでしょうか。でも難民問題は特別なことではなく、市民の支えがなくてはやっていけません。私たちの会を支えてくれる会員の中には福祉施設の関係者もかなりいるのですがそういう人をもっと巻きこめないかなと思います。日本の中で福祉の対象となっている弱者への関心をちょっと広げただけで、難民の問題もあるよ、在日朝鮮人の問題もあるよ、中国帰国者の問題もあるよと。少し考え方を広げたらそんな風に見えるのではないのでしょうか。

柴田 僕のオフクロも田舎にいて、一生東南アジアやアフリカの人になんて絶対会わないと思います。僕たちがこういう団体にいることで何が一番有利かというと、人との出会いが持てるということだと思います。そういうことによって自分自身も変わ



ることができます。

吉川 “REFUGEE” という言葉にはすごい意味があるんですね。宗教に帰依するという時の“帰依”という。難民は Refugee だから英語圏の人たちは「自分たちの仲間に入ってきた人たち」という感覚でとらえているようです。だけど日本だとかわいそうという感覚が先に立ってしまう。

内田 定住難民の場合はどういう問題点がありますか。

柴田 難民でいるうちはかわいそう。外国にいるうちは他人の問題だから涙していればいいのだけれど、生活の中に入ってくると避ける。彼らが日本人と結婚するのはとても難しい。日本人はその理由を暗黙に了解しているのだけれど、彼らは気がつかない。向こうにいた時は日本とは非常に豊かで自由な社会だと思っていた。ところが実際に日本に来たら、豊かなことは豊かだったけれど、日本人の中に受け入れてもらえない。恋愛しても相手の両親によってつぶされたりなど、定住が長くなるにつれて難民問題も在日朝鮮人問題と同じようになっていくと思います。

吉川 それで CCC をやっていて気づいたことがあります。今の学校は成績の上下で人間が判断されるというようなことがあります。難民の子供たちにとっては日本語のハンディがあるため決して日本人と平等になることはありません。だから彼らはこの競争社会で常に劣等感を感じているし、仕事だって単純なものにしかつかいません。ところが CCC でカンブチアの踊りをしたのですが、最初はへただったのが練習を重ねていくうちに度胸もついてうまくなりました。この間の中野の発表会はとてもよかったです。

その時思ったことは、彼らは日本人と対等になった。自分自身を表現することで対等になったということですね。日本人と同じ土俵の上では決して対等にならないけれど、違う土俵に立って初めて対等になった。多くの日本人は彼らが日本語を話し、日本人になるようにすることを要求しますが、相手の文化を理解しようとはしません。同じ土俵に上げておいて倒してしまう。そんな感じじゃないですか。だから彼らが自分たちを表現できるものをわれわれが

見る機会を増やしていけば、違った土俵の上での対等な関係ができていくのではないかと思います。

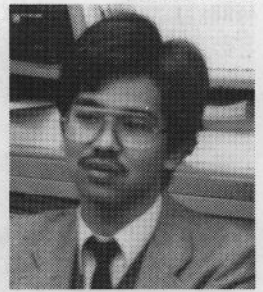
在日朝鮮人の二世が日本人と結婚するのを一世が絶対に許さないということをよく聞きますが、自分たちの社会をかたくなに守ろうとするのは日本の社会が閉鎖的で、その反発としての結果じゃないかと。僕たちは難民といわれる人との交流をもっと増やしてお互い対等の立場で知りあえる機会を作っていかなければ彼らも他の在日外国人と同じようにトンネルに入っていくような気がします。

内田 そのあたりを変えていくにはどうしたらいいのでしょうか。今、表現の場を提供するというのがありました。

森山 インドシナ難民も5年たって状況が変わってきています。以前は同情に甘えていたのが今では自分たちの権利を守ろうというようになってきました。今は過度期のような気がします。いろいろ事件も起こして、「どうして自分たちはこんな風になってしまうのか」と。だからこれから勝負だと思えます。今後彼らと日本人が手を取りあっているのかはまさに彼らの問題であり、私たちの問題でもあるわけです。これは彼らと接するボランティアにもかかわってきますし、彼らが住んでいる地域の住民や行政がどのぐらい長期戦でやっていけるのかにかかわってきます。

吉川 在日朝鮮人の親が母国語を誇りに思い、子供たちに伝えようとするのだけれど、子供たちは見向きもしない。親が勧めれば勧めるほど反発する。そして言葉が通じない以上に親子の溝を深めていく。それはカンブチアの人にとっても同じだと思います。

森山 子供たちが運動会で日本人とラオス人に分れて綱引きをやりました。すると子供が「私は日本人です」といって日本人といっしょに綱を引く。それで親は非常にショックを受けた。特に在日朝鮮人と違うのは彼らが国に帰るといふ思いを捨てていないことです。それでいて再びその歴史を繰り返して



SVA (曹洞宗ボランティア会)

タイのカンブチア、ラオス難民キャンプで教育・文化活動を中心に、タイ農村の開発協力、日本に定住した難民の支援も行っている。〒170 豊島区巢鴨1-28-5 ヒカリビル301
TEL 03-945-0981

CYR (若い難民を考える会)

タイのカンブチア難民キャンプで保育所を運営しながら保育者養成、織物などの技術研修、識字教育を行っている。〒150 渋谷区広尾4-3-1
TEL 03-499-1226

シャプラニール

バングラデシュの農民を支援しつつ開発問題に取り組んでいる。現地の人々が作った手工芸品販売にも力を入れている。〒160 新宿区西早稲田2-3-1 早稲田奉仕園スコットホール内
TEL 03-202-7863

いるのです。

笹尾 難民とはどういうものであるかということ
を私たちのような団体が一般の人に訴え続けていく。
そのことで問い合わせた人に対しては必ず答える
ということをしていくというのが、私たちを支
えて下さった人に対する義務だと思います。日本
人が海外に出かけていき援助することに疑問を持
つ人もいるので私たちの活動を理解してもらえ
るように訴え続けていくことが必要だと思います。

新たな国際交流を模索する

内田 バングラデシュとはすごく大変な所じゃ
ないかと思ってる人もいます。でも実際に
行くと「ああ、ここもやっぱり普通に暮らして
いるのか」なんて思ったりする。同じ人混み
でも東京にいるよりもかえってホッとして、
僕なんか救われるわけです。食べ物もおい
しいし。だけどそれが向こうの人にとって
何だという点もある。市民の交流とい
ってスタディツアーもやるけれど、それが
向こうの人にとってどんな意味があるのか。
「僕たちの社会はこうなんです。だから同
じ轍を踏まないで下さい」といってもいい
のですが、近代化の欲求の強いバングラデ
シュの人たちに対し、「私たちは近代を間違
えてきました」というのはすごく大変です。
またバングラデシュからワーカーを呼ん
できて近代の行きついた果てのようなと
ころで課題になっていることを伝えること
が今の段階で果たして意味のあることな
のかと思います。呼ぶ側に傲慢さがない
かと考えてしまいます。

柴田 みんなやっぱり豊かな世界を目ざ
しています。僕らが変わらなければ彼ら
だって変わらないと思います。僕たちが
向こうへ行ったら勉強させてもらうとか、
価値観とか意識を変えるようなことが
ないと新しい関係も見えてこないん
じゃないでしょうか。

内田 こちら側が勉強して得ているもの
が向こうの人にもわかってもらうとい
うことを抑えていかなければ、こちら
が勉強していることが運動であり、援
助であるというようなことになっては
まずいと思います。

柴田 海外協力、特に現地に行った
場合自分自身が大きく変わり得る瞬間
があります。だから日本人にとっては
なるべく大勢の人が向こうに行っ
た方がいいんだけど、向こうの社会
に迷惑をかけることがあっては
ならないし、難しい。僕たちも
そうだけど、今の日本の社会に
不満とか矛盾を感じている人は多

い。いろいろな問題がある中でたまたま海外が好きな
連中が僕たちみたいなのをしている。食べ物に
興味がある人、リサイクル運動に興味がある人など
それぞれ一番自分にとっかかりやすいものから入
っていく。でも基本的に抱えているものはいっしょ
だと思う。そうでなければなぜJVCと福岡さんが結
びついたのかわかりません。

吉川 ボランティア活動はみんな社会をよくし
ていこうとする活動だとすれば、ボランティア活動
がこれだけ盛んなのは現代の社会に不満なことが
いっぱいあるということです。だからうちでも、みな
さんのところでも、会員になろうとする人はなん
らかそういうものを持っているわけです。

柴田 僕たちは海外に、それも一般の日本人が
あまり興味を示さない第三世界に現場を持っ
ています。それを援助国と被援助国という関係
じゃなくて、新しい関係を日本の国内の不満を
吸収しつつ作り出していきたい。今年
の目標としてはお互いの関係性が見える
ようなことをやりたいですね。

森山 以前からサード・ワールド・ショ
ップをやりたいと思っていました。ボラン
ティアの受け入れの窓口も事務所じゃな
くて、お店においてね。ものだからわ
かり易いし関心も広がるという利点
はありますが、つながりがものに終
ってしまっただけで送り手の人間が
見えないという限界もあります。

内田 さっき定住難民の話が出ましたが、
バングラデシュ人が実は日本語の研
修とかいってかなり入ってきていま
す。日本語の勉強だといっても、週
に1~2回学校に行くだけであ
とはベンガル料理店などで働いて
いるわけです。そういう人も事務
所に来っていますが、運動を支
えるという意識ではないのです。

柴田 うちにもウガンダとかイラン、
アフガンの人から連絡が入ります。
思ったよりいろいろな国の人が
日本に来ているんですね。

内田 僕たちは「インド祭り」とい
うのをやっていますが、今度はア
ジア人の祭りをやりたいですね。
留学生とか、いろいろな国の人が
混ざりあって…。

柴田 どうせやるなら地方がいい
ですね。それぞれの会員を巻き
こんで。

内田 丁寧企画をして、それも
お互いに地方の会員に企画して
もらったらいいですね。今年ど
こか1カ所でやって、それが毎
年続けば…。

前川 この話はぜひ具体化したい
ですね。今日は長時間ありがとうございました。



古本がアフリカを救う

"古本リサイクルフェア'85"を終えて

中部リサイクル運動市民の会

—代表 萩原 喜之さんに聞く—

(写真の後列右から2人目)

— リサイクル運動を始められたきっかけは何だったのでしょうか。またそれまで萩原さんが何をされていたのかにも興味があるのですが。

リサイクル運動にたどりつくまでにはいろいろあるのですが、まず英会話のカセット販売の会社で1年ほど働き、営業のノウハウを知ることができました。それから手作りアクセサリーの製作販売をしたり、キャバレーの照明係なんかもやりました。その後『中部建築ジャーナル』を出しているところで、建築関係者が中心の同人誌『C & D』の編集をやりました。これはもっと身近な自分たちの町を見直すような雑誌を作りたいということから生まれ、市民が参加して公共空間を作るというのが目的でした。

その会社で働いている時に友人と下呂温泉に土地を買って農業をするという話が持ち上がりました。この話は結局だめになりましたが、会社をやめたいという思いだけが残って、退職することは決めていました。たまたま出勤の途中にラジオで聞いたリサイクル運動のことが気になって、早速電話をしました。やっているところが東京と大阪にあるというので、運賃の安い方大阪へ行きいろいろ話を聞いてきたのです。代表者の話の中で共鳴するところがあり、これだったら自分でもやれそうだと思います。—そこからリサイクル運動が始まったのですね。一人で始められたそうですが、どうしてこんなに大きくなったのか、その辺のことをお聞かせ下さい。

大阪に行ったのが1980年の10月で、次の年の2月にマスコミを通じて呼びかけたのが最初だと思います。名古屋でも不用品のデータバンクをやりたいから準備会を作りたいといったところ、約50人ほど集まりました。それが出発ですね。関西リサイクルが先行していたので、われわれもやれたというところはあります。そこで事務所を借りることにし、電話番号にボランティアの人に来てもらいました。3月末には不用品データバンクの情報もかなり集まりましたので、第1号の雑誌を作りました。これには僕が以前に同人誌を作っていたのが役にたちました。

—資金が問題だったと思いますが。

まず僕の退職金をつぎこんだのと、かかわってくれた人たちがそれぞれアルバイトしたり、知り合いに借金しまくりました。専従職員はそのころでも5人ぐらいいたのですが、生活に困らない主婦とか奥さんに食べさせてもらっている人とか、そんな人たちが無給でがんばりました。

—不用品データバンクの他にはどのようなことをされていますか。

不用品を再利用することから生活を見直すのが僕たちの目的でしたから、ガレージセールをやったり、資源リサイクルといいますか、空き缶拾いやゴミの再利用なんかもやっています。これはそれらとは別の動きですが、食からも生活を見直すということで、有機野菜を広げる運動もしています。それは土の問題でもあるのですが。

—それで福岡さんと結びついたのですか。

いえまだそこまではいっていませんでしたが、芽はあったわけですね。“宇宙船地球号を救おう”ということをやりたい。それを続けていくうちにシステムを作っていきたい。目的からすればすべていっしょなのです。それがモノを大切にすることだったり、食とか健康に気をつけるということだったり、いろいろな入口があると思います。

そのほかに僕たちは、地域のコミュニケーションを計るためにお祭りをやったり、手作りクラブという一種のカルチャーセンターみたいなこともしています。ガレージセールをやっている時にその不用品の中に手作りのものが多いのに驚いたのです。それらのものを売ることによって客観的な評価を得たり技術の交換もできる場を提供して家に閉じこもりがちな主婦にも参加してもらおうと思いました。私たちはモノを大切にしようという運動をしているのですが、それにはものを見つめる、作る、ということが大きな意味を持っています。また今は余裕をもって生活し、空いた時間を有効に使いたいといった人も増えてきて、日曜大工のクラブなどもやるよう

になりました。

それらとは別の動きですが国内の森林資源を活用しようという運動やナショナル・トラストもやっています。このように次から次へとアイデアが浮かぶので活動には際限がありません。それぞれが自分のやりたいことを持ちこむ場になっています。

— そうやって活動が広がっていくのはJVCと似ています。それではどのようにして“砂漠に種をまく人の会”とつながっていったのでしょうか。

新聞などのアフリカ救援に関する投書の中に、単にかわいそうというのでなく、自分たちの生活を問いかけるものが多いので飽食の日本を見直そうということから、朝日新聞の桃井さんが取材にみえました。私たちもアフリカ救援には関心を持っていましたし、何かしたいと思っていました。そのころ福岡^{注1)}さんの記事を読んで興味を持っていたので、福岡さんが講演されるという乳研連^{注2)}の総会に出席したわけです。その時にアフリカに行って種をまきたいという福岡さんと、その場を提供できるJVCを支援するという形で、“砂漠に種をまく人の会”ができ、僕たち自然な形で入会することになりました。

— そこでJVCとつながったのですね。

はい。僕たちもアフリカを自分たちの生活の視点から見たいと思っていましたし、ユニセフや赤十字だと大きすぎて自分たちの集めたお金の行き先が見届けられないと思い、JVCの農業プロジェクトを支援することにしました。はじめはJVCが何なのかよくわからなかったし、心配することもなくはなかったのですが。これだけ古本フェアの反響があったというのは、アフリカブームに加えて消費者運動、リサイクル運動など“時代が作り出した”現象なのかもしれません。

— 集荷目標が30万冊で実際には27万冊集め、売上げも目標額の1000万円を達成するなど大成功だったのですが、御苦労も多かったと思います。

準備は'84年の12月から始めました。本は6月から8月にかけて集め、9月に古本フェアという予定だったのですが、最初はなかなか盛り上がりませんでした。それが何十回にもわたるマスコミの宣伝によって8月の終わりごろにはものすごい勢いで本が集まりました。本の集荷のあとは整理に追われ、古本フェアの最中は夜間に整理して昼間に売るという具合でもうクタクタでした。こんなに長丁場の企画は初めてだったので、本当にくたびれました。

— スーパーマーケットや運送業者などの企業もた

くみに巻きこみ、これも成功の一つだと思いますが。

はい。ユニーは15周年を迎え、アフリカに衣類を送ることを考えていました。それを古本に切り替えたのです。僕たちが企画と人的側面を請け負い、ユニーには場所と倉庫を提供してもらいました。西濃運輸は宅配便で本を運んだのですが、何回もマスコミに名前が載ることでそれぞれ宣伝効果はあったと思います。私たちは企業とギブ・アンド・テイクをしているわけで寄付というかたちにはなりません。

— ものを売るのが目的のスーパーマーケットと、再利用するリサイクル運動は相反しませんか。

よくいわれるのですが、私たちはそうは思いません。多数の人々が集まる場としてスーパーは格好の場所です。大ぜいの人に僕たちの主張を訴えることもできますし、スーパーも消費者がよいものを求めればそういうものを仕入れようと努力するはずですし、安全な食べものも手に入り易くなります。

— 最後に今回の古本フェアについて感じたことがあればお聞かせ下さい。また大ぜいの人を巻きこむコツなどがあれば教えてほしいのですが。

最重要点は、多くの人たちが参加できるシステムと場の提供だと思います。お祭りというのもその要素の1つです。人が人を呼ぶというか。私たちは学生をあてにしていたのですが9月は試験の月に当たり急に人手がなくなりあわてました。そうすると主婦パワーががんばって乗り切ることができました。ボランティアは公募して約2000人もの人が手伝ってくれました。小学2年生から80歳ぐらいのお年寄までです。忙しい時には本を買いに来た人が売る人に早変わりしたり、何が何だかわからないほどでしたが、思いがけないところから援助があるなどの収穫がありました。

20-30人の人の動きしかないJVC東京事務所の活動からみると、多くの一般市民を巻きこんでいるリサイクル運動は驚異です。日常生活に根ざした問題は取り組みやすいのかもしれませんが、アジア、アフリカの問題も生活と切り離されたところに存在するのではなく、同時代をつなぐ複雑な糸がからみあっています。それは単に政治、経済の問題ではなく、人として生きる姿勢のようなものを問われているのではないのでしょうか。単に日本と外国が補完関係にあるから仲良くしなければならぬというのではなく、地球の同じ問題をいっしょに解決しようとする仲間として外国の人々を考えたいと思います。その意味で中部リサイクル運動などの市民運動と私たちの活動は連帯できると思います。(編集部)

注1) 自然農法家、福岡正信さん

注2) 産直の牛乳などを扱っている市民団体

私たちは始まるまで待てない

「始まるまで待てないプロジェクト」結成報告

谷山博史

はじめに

今、世界には、日本人には想像もできないような不正と悲惨があります。飢餓、戦争、難民、そしてそれらを創り出して潤う者たち。しかもこれら本来理性によって解決できるはずの不正と悲惨は、人々の無知と無関心に守られてかえって増大する一方です。

JVCに来る人々の多くがこうした世界の置かれた危機の状況を感じています。しかもそれを座視していることができないのです。座視して矛盾の進展に結果として加担するわが身に甘んじることができないのです。だから社会的な地位を捨て、安息を捨て、場合によっては親子の縁をも切り捨てて世界の矛盾の噴出した現場へ飛び込んで行ったし、今もそういう人が跡を絶たないのです。

海を隔てたかの地で進んでいる危機に対するあまりにも大きな無知と無関心。JVCに参加する人たちは誰もがこの身近な怪物にいらだっています。このいらだちを静めるため、今までのわたしたちは、日本社会を切り捨てて現場に飛び込む他ありませんでした。一方さまざまな事情で国内に留まっている者たちは、こうしたいらだちを静めることができず、あがき、苦しみ、いたずらに自信を失ったりもしていました。国内でボランティアとして集まったわたしたちは、このような胸苦しい状況の中で、「もうたくさんだ、もう待っていることはできない」という自覚に至ったのです。渡海するまで待っていることはできない。日本が変わるまで待っていることはできないと。

「始まるまで待てないプロジェクト」成立の経緯

こうして「始まるまで待てないプロジェクト」という奇妙な名前の集団が結成されることになったのです。JVCのメンバーとして国内で何か活動できないか、日本を現場として活動することはできないものかという欲求がやっと今、形になったのです。

成立の経緯について、JVC内部での事情を少し話しましょう。

これまでのJVCでは、オリエンテーションなどを通じてJVCに関わりをもった人たちがその関わりを持続するのは難しいことでした。今、手もとに

あるオリエンテーション参加者名簿に記載されている200人余りの未知の人々の名前がそのことを証明しています。先に書いたようないらだちと、JVCに行けば何かできるという期待を抱いて訪れたであろう人たちが去って行ってしまいました。何故でしょう。一つ言えることは、JVCの活動に参加したいという人たちを国内で受け入れる受け皿がJVCにはないということです。もちろん雑用はあります。専従の人たちの手伝いを通してJVCを知り、JVCを支えることは大切です。しかしそれのみでは、「主体的な活動」というボランティアな側面が欠けるのです。実際の話、初めての人にとっては雑用を見つけることも大変ならば、専従の人と話をすること自体至難の業なのです。わたしたちは自分たちが初めてJVCに来たときのことを振り返って、もしあのオリエンテーションの場で「僕たちは今JVCの中でこのような活動をしている。だから僕たちは君を必要としている。さあ一緒にやろう」と言ってくれる人がいたらどんなに励みになったことだろうと考えました。わたしたちのような人間が、今の日本社会では孤立した存在であることは事実なのですから。

こうした事情から、「待てないプロジェクト」は出来るべくして出来たものと言えるのです。そこでプロジェクト結成の主旨は、一つ、JVCに初めて来た人たちと専従の人たち及びJVCの海外での活動とのパイプ役となる。一つ、各メンバーが主体的な活動を通して自己啓発していく場となる。一つ、メンバー各自の心と日本社会の無知、無関心の殻を突き崩して日本の世界からの孤立、ボランティアの日本社会からの孤立を解消していく力となる。以上です。現在に至る経過を見てみますと、8月、第1回ミーティングをもって結成。10月、合宿にて共有する問題意識を煮つめる。その後組織のあり方を決定。11月、国際平和年のための催しへの参加の方向とその企画内察決定。現在上映運動とサッカー大会を準備中。

メンバー構成

「待てないプロジェクト」にはどのような人が集まっているのか。ごく普通の生活をしている人たちで

す。しかし熱い思いを胸に秘めて、何かせねばならないと考えてJVCに来た人たちです。今現在男9名女9名の総勢18名。加藤・大場・若生・鳥谷部・山本・太田・石森の各氏は動機に通いながらの奮戦。保坂・清水・河合・田辺・鈴木・高岩・高畑・米田谷山の各氏は学生。吉武さんは主婦、島津さんは家事手伝い、といったしだいです。メンバーは皆それぞれに条件を抱えているために継続して活動できる人は限られてしまいます。したがってメンバーはまだ不足していると同時に、チーム・ワークを練り上げて連携をよくしていくことが重要な課題となっています。

現在の活動

次にプロジェクトの組織について説明しながら具体的な活動状況をお知らせします。

JVCに来た人たちすべてに「待てないプロジェクト」は開かれています。メンバー全員を結びつけるものは、月に3回開かれる全体のミーティングです。このミーティングは、専従者との交流の場となるとともに新しいプロジェクトが生まれる母体とも、新しいプロジェクト間の連絡・協力の間ともなるのです。

このミーティングから最初に生まれたのが学習会です。これはわたしたち自身の蒙を啓く必要上当然なくてはならないものでした。毎回識者や他のボランティアの人たちを招いて意見を交換しています。これまでに、JVCの前バンコク事務所長の高塚政生さん、事務局長の星野昌子さん、『アフリカの飢えとアパルトヘイト』の著者楠原彰さん、『市民の海外協力白書』の編集者吉田新一郎さんに参加していただきました。この他に、留学生や元難民の人たちとの懇談会も企画しています。

さて、日本のボランティアが人々の無理解のために社会的に孤立していることを考えますと、海外の救援活動といっても海外だけが現場ではなく、日本社会もまた重要な現場であるという認識にいやおうなく至らされます。日本人に世界の現状とボランティア活動に対する理解を求めるためには、わたしたち自身が社会にアプローチしていくしかありません。そのための第一の試みが国際平和年のためのプロジェクトです。これは神奈川県を委託を受けて県の国連協会本部が主催するもので、JVC（「待てないプロジェクト」）はその実行委員会に委員を送り出すとともに、自ら企画したプロジェクトを実施する機

会が与えられています。この機会を利用してわたしたちは、市民の中に足を踏み出そうとしています。

企画の一つが上映運動です。国際平和年の今年いっぱい神奈川県内の市町村を上映会と講演会を組みにして巡回し、市民に南の国で進行している危機の実状とJVCの活動への理解を広げていく試みです。これまでに上映フィルム選定のための試写会と中学生50人を対象とした上映会を行いました。また中学生からは感想文を集めて資料にしています。さらに現在稲城市のあるボランティア・グループと共催で、市民を対象とした上映・講演会を計画しているところです。このような共催という形をとって、各地のボランティア・グループと連帯していくのも上映運動の目的の一つなのです。

このような地味な活動と平行して、難民問題に対してはからめ手から攻める試みがあります。難民を交えたサッカー大会がそれです。インドシナ難民のチームと日本人のチームとの対戦をコーディネートして、最終的には大会にもっていかようとしているのです。これは、日本社会から孤立しがちな難民の人たちと日本人が接する機会を創り出すことによって、日本人の難民に対する偏見や無関心の殻を突き崩すことがねらいなのです。又、JVCのチームを作って難民のチームと交わろうということも考えています。

次に「グリーン・フォー・アフリカ」(仮称)つまりエチオピアでの農場作りのためのキャンペーンについて触れたいのですが、これは「待てないプロジェクト」として正式に参加することが決まってから詳しく報告することにします。

以上のような活動がどれほど効果のあるものなのか、わたしたちにはまだ分かりません。ただ最後に強調しておきたいのは、わたしたちの活動が批判するための活動ではなく、問題を共有するための活動だということです。連帯のための活動だということです。わたしたちは日本が世界の一員として、世界の危機と希望を共有していけるような場を作りたいと考えるのです。海外のボランティアを日本社会が支援してくれるように、さらには世界の飢餓や戦争の悲惨が消滅してボランティアの必要がなくなるように。課題の巨大さと自己の非力とを考えるについつい弱気になってしまいがちなわたしたちですが、やはりやる以外にはないと思います。どうか読者の皆さん、アドバイスを下さい。励ましを下さい。活動に参加して下さい。

「同じアジアの人のことをもっと知ってください」

'85 9月7日

シン・カウンタム・レック

青年ボランティア国際シンポジウム 横浜国際会議場において

定住センターの日本語と職場の日本語は違う

みなさん、こんにちは。わたしは、ラオスから来たシン・カウンタム・レックと申します。みなさん、ラオスという国はどこにあるか、知っていますか。ラオスの国は小さな国です。となりは、タイ、ビルマ、中国、ベトナム、カンブチアに囲まれた国です。まだ発展しない国。具体的には、大中企業はありません。技術、持っている人は非常に少ないです。

今回は、ここでみなさんに、わたしや他の日本に住んでいる人、難民の人々の話ができることを大変、うれしい、思います。あまり上手に日本語ではないですが、どうか最後までがんばって聞いてください。

わたしは昭和54年12月28日、日本へ来ました。最初は姫路定住促進センターへ3カ月間、生活をしました。まず、最初は、日本語を勉強しました。センターで勉強した日本語は、ほとんど、ていねいな(きちんとした)言葉だけでした。また、先生の話方もゆっくり、とてもわかりやすいです。しかし、センターを出てから、会社で言葉の問題がありました。たとえば、会社の人達、朝、挨拶するとき「オッス」と、現場のなかでは「こっち来い」「持ってこい」とか、または昼ごはんのときに「おい、メシ行こう」と、言いました。こういう問題を、私自身として、ほとんど知りませんでした。また、3カ月という期間も、大変、短いでした。言葉が3カ月だけ勉強するだけでは、あまりうまくできません。それに、それでも、なんとか定住しようと、今も努力しています。

次の問題は就職のことです。しかし、日本での仕事の内容は、ほとんどわたしたち、経験したことのないような、中小企業の(工場や作業現場の)危ない仕事が多いです。たとえば、高速カッターとか、今まで見たこともない、使ったこともないものが、ほとんどです。だから、慣れるまで、みんな、とても神経をつかいます。それに仕事が始まるときは、まだ日本語がよくわからないときで、その会社の内容が、状況が、会社はいつてしばらくして(始めて)わかるようになりました。これも、わたしたちが日本にきて困ることのひとつです。

職場では、制度的にも人間的にも差別されている

第2問は、日本に定住していくために必要なことや、日本人として考えてほしいことをはなしたいとおもいます。

まず、職場の問題です。

たとえば、あるプレス会社の仕事で、手と足を使う機会があります。日本人は8時間で8000個作ります。しかし、ある難民の人は8時間に1万個作りました。そのとき、社長が難民の人たちをほめました。社長がいなかったとき、逆に日本人が怒って、わたしたちに文句をいいました。「あまり早くやらないでください」または「早くやっても給料は同じです」と言いました。具体的には、みんなで使う機械も貸してくれないとか、これもだめ、あれもだめ、または基本給も日本人より低いのでしょうか。こういう問題は会社のなかに、難民に対する差別としてあります。

次は厚生年金のことです。わたしは、勤めてから毎月、厚生年金を給料からひかれています。年金が65歳になったらもらえるかどうか、まだはっきりしません。今まで難民関係の方々にあったとき、たずねましたが、はっきり答えはもらえませんでした。こういう問題は誰に聞いたらいいのでしょうか。

次は近所のことです。家庭と家庭のつきあいが、ラオスに比べて、とても少ないです。

最初はびっくりしました。わたしのうちにも、最初の2年半くらい、近くの人、誰も遊びに来てくれませんでした。ラオスにはこんなことはありません。今では近くの人、ちょくちょく来てくれるようになりました。

定住センターには通訳もいなかった

第3問目、今、行われているインドシナ難民の現状、活動について話したいと思います。

まず現状には、日本政府からのと民間ボランティア団体からのとあります。わたしが最初にいった定住センター、姫路定住センターですが(日本政府が)お金をだしています。

そこで日本の習慣とか言葉を勉強しますが、3カ

月たつと出ていかなければならない。

そこを出たあと、民間ボランティア団体に頼らなくてはなりません。そのひとつJVC、国際ボランティアセンターグループは、とても難民の人たちのために、いろいろなことをしています。たとえば、わたしたちが困ったとき、事務所に呼んで、どんなことでも、家まで来て相談にきてくれます。また、日本語の家庭教師をしてくれたり、子供たちの学校からのプリントを説明してくれたり、あとは、ひまなとき、家族と一緒に、どこか公園や海にいったりします。それに、ボランティアのひとたちは、ほとんど遠くに住んでいます。綾瀬市内には4~5人のボランティアしかいません。これでは急な用事の時など、なかなか気軽に頼めないのです。JVCの人たちも難民の人たちの近くで活動してくれるボランティアを探すのに苦労しています。

最後は日本と外国を比べること。日本は難民の受け入れが非常に遅れています。ラオスから一番最初に来た難民は、わたしの家族です。センターに入ると通訳もいませんでした。

話したい時は、手をつかって。大変、困りました。外国と日本を比べましたら、たとえば、オーストラリアでは難民事業部があります。そのなかに通訳がついています。困ったとき、いつでも電話すれば、すぐとんできます。日本の定住センターに100%ラオス語が話せる人もいません。簡単に言えば、私達、困ったときの窓口はないのです。(難民のための)110番を、是非、つくってほしいとおもいます。

今、わたしのほかに、約800人のラオス難民が日本にいます。そして、約4000人のインドシナ難民もいます。今日、この機会で、少しでもこのような同じアジアの人々のことを知ってもらえたら嬉しいです。これから日本と一緒に生きていくために、何をしたらいいのか、みなさんと考えてみたいと思います。



すっかり日本の社会に溶けこんだように見えるが……
(文中とは関係ありません)

シンさんの講演に接して

もし、私自身が全然言葉が通じない地に、難民として永住せざるを得なくなったら、と考えることがある。今まで積み重ねてきた勉強や仕事上のノウハウは、生活するためには、ほとんど役に立たないだろう。肉体労働の経験のない事務職である私は“言葉”を取り上げられたら、裸同然である。そこでは、生活保護を受けて生きる以外、どんな方法があるだろう。多少、話を通じる英語圏以外、1人旅すらおぼつかない私が、金なしに何かできるとは思えない。

もちろん、なんとかして“お金”を持って難民になりたい。子どもには教育を受けさせて、立派な人生を送らせたい…、夢はどこまでも広がる。そんな“みじめな”生活を送る自分を支えるものは何だろうか、それは“自分に対する誇り”だけではないだろうか、ほかにはないのだから。

こう考えてくると、私たち日本人が、“永住難民”の誇りをいたく気づけていること、そして、それがいかに残酷なことであるかに気がつく。「難民の子のくせにジュースを飲んで生意気だ」「難民のくせに金を持っている」「難民のくせに子どもを大学にやろうとする」もし、私がそんなことを言われたら…。しかし、これはたとえ話ではない。日本にいる難民が、経験している言葉なのだ。

東南アジアの人たち、というと、文明から取り残された“南洋の土人”的印象を持つ人がいるかもしれない。しかし、東南アジアの諸国は、中国とインド、アラビア、ヨーロッパの国々の通商路として、古くから栄えてきた。そこには幾多の王朝が没興し、幾多の戦争があった。そしてそれを通し、島国日本よりはるかに強い、民族意識、固有の文化への誇りを、骨がらみに身につけてきた。いってみれば、18世紀までは、日本より先進国だったのだ。

日本語がしゃべれないのは彼らの罪ではない、それなのに早口でまくしたてたりはしないだろうか。あなたがたは何も分からない。私にまかせないという態度をとらないだろうか。難民のくせに私よりいい生活をしてと思わないだろうか…。

彼らは見ず知らずの、まったく異質な社会に来て、隠してはいるだろうが、非常にデリケートになっている。もっともっと、相手の立場にたって思いをめぐらす必要があるだろう。ベトナム特需とかいってインドシナ半島に爆弾を落とすことで、物質的繁栄を享受した国なのだから。(N)

陸の孤島 カンプチア

傷ついた微笑の国



1985年10～11月の調査を終えて
熊岡 路矢
JVC事業担当

これほど深く傷ついてしまった国も少ないと思う。田畑や道路、建物の荒廃など物理的な破壊もさることながら、何よりも人々が深く傷ついている。何かのはずみで家族の話になったりすると、もはや絶望や悲しみの時はるか通り越したのか、深刻な事柄を淡々と、時には「クメールの微笑」を浮かべて話してくれたりするので、こちらがとまどってしまう。

現在プノンペンの役所で西側の団体を担当しているサメット氏(40代)は、妻と3人の子供達に囲まれ、貧しいながらも平和な生活を送っているように見える。役所の月給300リエル(約3ドル=600円ちょっと。ちなみにラーメン1杯が屋台で約10リエル)では生活できないので、英語や仏語を教え、日曜日はマーケットで働いたりして稼いでいる。彼は最初の家族をボル・ポト時代^{注1)}(1975年～78年)になくしている。

1975年4月17日、サメットさんは勤め先の高等学校から家にもどれないまま、プノンペン北方への強制疎開の行進の中に追いやられ、朝別れた妻と娘(当時5才位)に2度と会えないこととなった。後に友人や知合いからの情報で、2人は東のプレイ・ベンの農村に移動させられたところまで分かり、1979年自由に動けるようになった時に、農村とプノンペンの旧住居付近とで探し回ったが、既に死亡しているようであった。遺体を確認したわけではなかった彼は、わずかの望みをもって更に2年ほど旧住居付近で待っていたが、いよいよ絶望的であることが分かり、人生再出発の決心をした。サメットさんのようなケースを他にもたくさん知っている。一方レストランや町の屋台で働く女性と話をすると、未亡人や母子家庭を構成している人が多かった。

何でこんな風になってしまったのだろうか？

それを考えるには、カンブチア現代史を大ざっぱにでもさらっておく必要がある。ヨーロッパ列強の権益争い、第二次世界大戦、戦後の東西対立の対象となった東南アジアにあって小さな国カンブチアは、大国の動きに翻弄され続けてきた。大戦後に限っても、フランス、アメリカ合衆国、中国、ソ連、ベト

ナムなどの国がカンブチアの動向に大きな影響を与えてきた。それでも1950年代、60年代は比較的に平和な状態を保つことができた。しかし、1970年頃からは、世界の超大国、米・中・ソの影響が、国内の異なる立場のグループの盛衰にも連動する形でカンブチアを直撃するようになった。シアヌーク国家元首の外遊中に起こされた、ロン・ノルによるクーデター、米軍による「解放区」爆撃は皮肉にも、本来政権掌握までの力をもっていなかったクメール解放戦線(クメール・ルージュ)を押し上げる効果をもって、1975年4月17日のクメール・ルージュのプノンペン入城に至る。名目的国家元首シアヌークは早くも棚上げされ、クメール・ルージュ主体の政権は、根本的社会改造の「理想」を主張して、貨幣経済の廃止、都市から農村への住民の強制移動、「鎖国」など、実験的な政策を実施する中、旧体制、インテリ、都市住民に対して報復的な行動を強めていった。1975年4月以後3年半余りのボル・ポト政権下で起きた事は、なかなか外の世界に伝わらなかったばかりではなく、伝えられるようになってからも、即座には信じられないような内容であった。支配の厳しさに地域差はあったものの、裁判を伴わない処刑および、苛酷な労働、生活条件の中での病死・衰弱死をあわせてこの間になくなった人々の数は控え目に見ても100～120万人以上といわれている。この他に1970年来の戦闘による死亡は、兵士、民間人をあわせ数十万人に及ぶ。人口700万人程度の小さな国でもあるし、このような被害は一国にとって致命的な損傷である。1978年来、ベトナムは直接には国境紛争によっておびやかされた国家安全保障の観点から、擁立したクメール・ルージュ内反ボル・ポト・グループと共に、ボル・ポト政権と軍をタイ・カンブチア国境まで追い散らす。

そして今は？

現在のプノンペンはちょうど第2次大戦後(昭和20年代)の東京のように見える。壊れた建物、停電、出ない水道、傷ついた人々。しかし生き残った者は

注1) 1975年から78年までの民主カンブチア政権を便宜的にボル・ポト政権と呼称する。

しぶとく前に進むしかない。荷車と自転車、中古品や部品の再生、粗末な手工具。こういうもので出発するしか他になんにもない。ナイーブな人々（このナイーブさは明らかにカンブチア現代史において裏面に作用し、自らつぶれかかってしまった）は、他国か他民族あるいは自らのあるいは無能なあるいは苛酷な「指導者」によってもまれ、たくましくなったように感ずる。生き残った人々のエネルギーはマーケットや道ばたの商業活動にも反映し、一見復興が進んだかに見える。しかしよく考えると、にぎやかに見えるのは、簡単な加工を施した食べ物屋さんや甘い物屋さんだけで、社会全体の再建は決定的に遅れている。私はカンブチアの復興は20-30年とはかかると思っている。何故か？穀物や果物を調理することは短時日にもマスターできよう。しかし、一国の根幹を支える行政や医療や教育や技術の人々を大量に失ってしまった（死んだ人もいる。海外に逃れた人もいる）カンブチアの回復は決して容易には達成されない。今、赤ちゃんや子供である世代が、東側や国連、西側の有効な援助を受けて、社会の中心になろうとする時ようやく曙が希望が見えてくるのではないだろうか？

カオイダン難民キャンプの人々はどう反応したか？

11月プノンペンからバンコクにもどり、カオイダン難民キャンプを訪れた。JVC技術学校のカンブチア人スタッフ約50人と、プノンペンの状況話をした。その中で、「JVCがカンブチア国内で活動を行う可能性があるのだがどう思いますか」という事と、「長い目で見て第三国（米・欧・日など）へ行くより本国に戻ることを考慮してみたらどうですか」と、いささか挑発的に聞いてみた。その時、学校はハチの巣をつついた騒ぎとなり、批判、反論を受けたが、驚いた事に、多くの人々はカンブチア国内でも活動する事に賛成し喜んでくれた（もちろんこれは現状を即肯定したり、帰国する意思の表われではない）。理由を要約すると、現実に苦しんでいる同胞に役に立ってほしい、カンブチアの自立に力をかす、中立化の一つの原動力になってほしい、共に生きる者としてはそこに一緒にいてほしい……であった。

次にどういう条件が成立すれば国に帰るか、という質問には次のような答がもどってきた。1. ベトナム軍が出ていくこと。2. カンブチア国内と周辺地域の平和と安全がよみがえること。3. 帰国者の安全が国連などによって保障されること。整理して

しまうと簡素であるが、ここに至るまでに約2時間、「今の時点で本国帰還を主張しても、現実の安全保障がないじゃないか!」、「4週間ぐらいの滞りでカンブチアの現状の何が分かるのか？」など激しい批判も受けて、又通訳してくれた人とも口論した。しかし、日頃静かに、それこそ「クメールの微笑」で穏やかに仕事をしてきた人々が、久方ぶりに顔を紅潮させ、目を輝かせ、ツバをとばし、生き生きと日頃の思いをぶつけてくれた活気ある時間であった。

中にたった一人だったが、すぐではないが本国へ帰る方向で考えたいという人が現れてくれた。「いざれプノンペンでお会いしましょう」といって別れたけれど、そこで一番大事なのは、本国帰還の方法と帰還者の安全保障の問題である。私達民間団体にも出来ることはあろうが、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）やICRC^{注2}への期待は大きい。本国帰還といってもタイ側から国境の難民村におしこむのは、適切なあり方ではない。村が政治党派で分れている上に、途中地雷源、戦闘地帯があるし、ヘン・サムリン側、ベトナム側の対応も一定ではなからう。タイ-ラオス間で行われている様に、タイ政府、カンブチア政府、UNHCRの三者で協議をし、保障を確認しあって行わなければならない。1. 空路又は海路カンブチアに帰国するルートを開く。UNHCRが立会う。2. 生活のために農具を与える。3. 定期的にUNHCRが訪問し、生活状態を調査する。最低これらのことがないと、具体的な帰国への提案にならない。

日本の復興—私達に何が期待されているか？

ここでは、カンブチアの人々（国内・海外をとわず）の意見を代表している、と私が思った、あるカンブチア人の言葉を引用して、読者の皆さんにも共に考えてもらいたい。

「物質的な援助も、まして技術的な援助ももし受けられれば誠にありがたい。しかし最も私達が必要としているのは平和な環境です。それなしにはあらゆる復興への努力も空しい。あなた方日本人は、原爆をうけ、戦争に敗れ、戦後のきびしい条件の中、奇跡の復興をとげました。何よりも平和の価値と意味を知っているでしょう。私達カンブチアは超大国（米中ソ）のゲームによって苦しみました。そして今も外圧と内戦の状態は続きます。もうこれ以上流血を見たくない。日本の皆さん、何とかカンブチアに平和が訪れる手伝いをして下さい。それが最大の贈り物です」私達はこの問いに答えられるのでしょうか？

注2) 赤十字国際委員会

手作りの機関誌 —『そんぼっと』

(No.27から『そんぼんと』は『そんぼっと』になりました)

大場 きみよ

『そんぼっと』編集長

私たち日本語家庭教師活動の機関誌として『そんぼっと』は1983年2月に創刊し、以後月1回のペースで発行してきました。現在27号に至っています。発行部数150部で各地区のボランティアと諸団体に配布されています。

内容は主に各地区で開かれる月例ミーティングの議事録、神奈川県大和市にある日本語教室から発行される大和通信、プロジェクト運営に関わる提案、活動上の記録、さらに各種催し物の案内、ちょっと耳寄りな話という様な情報誌的面や個人の自由な意見の発表の場としても有効に使われています。会う機会の少ないボランティア間をつなぐ役割をも果たしているのです。ですから原稿はあまり内容を厳選せず、多くの意見を掲載しています。

時折、投稿の中に「ボランティアって何だろう?」「自分は何をしているのか?」などとあり、自問自答を繰り返して活動するボランティアの姿が浮き彫りにされています。常に活動の基本的な意義を明確にし、定住者との自然で人間的なつき合い方を模索しているようです。

『そんぼっと』の必要性は第一に各ボランティア自身の痛感するところです。日本語家庭教師活動は一人のボランティア対複数の定住者というケースがほとんどで、彼らの問題に直面した時、それをどう吸い上げて対応してゆくかを考えると個人の狭い見解で解決するよりも、経験を積んだより広い見方の中で判断できるといったメリットがあるのです。私たちの活動もこれから先、定住者の身近な相談役として増々多様な状況にぶつかってゆくでしょう。その一方でボランティア間のつながりは希薄になりがちです。それぞれのボランティアが学業や仕事との両立を前提として関わっているので、ミーティングに出席できない人にも紙上を通じて関係を保ち、共通の認識を高めてゆくことを目的に作っています。具体的には日本語教授法や生活面でのアフターケアの充実を図り、共に学べる場の設定、自己紹介、他者紹介形式で多くの定住者との出会いを目指しています。さらに各地区ごとで企画を練り、研究発表するなどすればなかなか面白く読みごたえのある雑

誌になっていくでしょう。

『そんぼっと』はまだまだ可能性を含む雑誌です。その可能性を現実のものにする一つの方法は日本語教師自身の確固たる自覚です。国内で定住者と直接つき合っているのは私たちだという自覚。彼らの存在・生活・悩みを知っている友人なのです。私自身は先生、生徒(教える側・教えられる側)という固定した立場を無意識のうちに築き上げているような気がして、まだ本当の友人になりきったかどうか心配している段階ですが。

ミーティングを通して感じる定住者とボランティアは気のおけない関係でとにかく明るく、楽しい雰囲気です。こんな希少な経験を持つ私たちは幸せだと思います。彼らの素顔をもっと知るために文化、習慣、民俗的なことなどを多岐にわたって彼らから学んでゆくことも『そんぼっと』の課題ではないでしょうか?

最後に『そんぼっと』の意味と究極的な目標をお話しておきたいと思います。『そんぼっと』はカンブチア語で“手紙”という意味です。手紙はコミュニケーションの手段の中でも一方的に自分の本意を相手に伝える要素があるのですが、本当に大切に思う人に気持ちを伝える時は自然と素直で謙虚になる様です。一方的に手紙を送るより相手からの返事をもらえるならきっと両方の気持ちはもっと近づいてゆくでしょう。今私たちから定住者への『そんぼっと』ですが、近い将来、彼らからの手紙が届けられたら…。それはすてきな事でしょう。彼らと私たちの目に見えない距離を縮めてゆくために共に歩み寄ってゆきたいのです。

『そんぼっと』紹介にあたり、認識不足の私が独断と偏見で書いてしまったきらいがあるので、初めて『そんぼっと』を知る方にはよくわからない部分が多いかと心配ですが、とにかく一度お読みになって頂けたら幸いです。投書なども大歓迎です。JVC事務所内『そんぼっと』宛に連絡して下さい。私たちと一緒に彼らの事を考え、学んでゆきましょう。そして友達の輪が広がれば最高です。よろしく願います。

JVCの活動はインドシナ難民の救援から始まったのでタイに行ったメンバーも多く、タイやカンブチア料理にも馴染みがあります。今までは日本で東南アジアの料理を食べる機会などあまりなかったのですが、このごろのアジアブームもあいまって専門店も増えてきました。その中にはインドシナ難民として日本に定住した人のお店もあります。今年は8回シリーズでこれらのお店を紹介していきます。

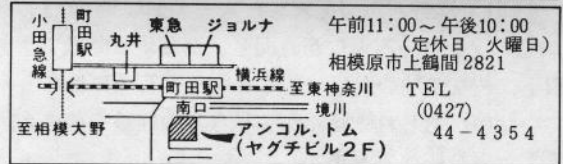
タイでボランティア活動をした人も、これからインドシナの人々と友だちになろうとしている人もぜひ行って下さい。家庭的なお店も多くいろいろ楽しいおしゃべりもできるでしょう。

最近発展の著しい町田も国鉄の南口にまわると人通りもぐんと少なくなる。駅前の駐車場を右に見て境川という小さな川を渡るとすぐアンコル・トムのあるヤグチビルである。駅から歩いて1分とかわらない。

アンコル・トムはこの10月にできたばかりなので知名度も低く、まだまだ経営は順調ではない。私たちが訪れた水曜日はまわりの商店街の休日ということもあって、お昼時というのに閑散としていた。手のすいたオーナーのセタリンさんは「全然もうからないよ」といいながらも余り気にしている風ではなく、私たちが楽しそうにおしゃべりしながら注文した焼ソバやクィティオ(カンブチア風ラーメン)を作り始めた。

このレストランをきりもりしているのはセタリンさんと妹さんの美しい姉妹である。お姉さんのセタリンさんは日本の文部省の国費留学生として学校教育や社会心理学を学ぶため1974年に来日した。それから現在に至るまで国内の政変を何回か経験している。ほとんどのカンブチア人はボル・ポト時代に肉親を失っているが、セタリンさん姉妹も例外でなく、御両親と4人の兄弟が行方不明という。日本には2人の弟さんもお店が軌道に乗ったら弟さんたちに任せたいのだが今はとても無理のようだ。

「弟たちがお店をやっているようになったら私はやめたいの。私にはやっぱりあわないみたい」。レストランをする前は東京外語大でカンブチア語の講師をしたり、辞典作りのお手伝いをしていたので早く復帰したいのだという。



焼ソバは中華料理の揚げ焼きソバと同じだがソバはビーフンである。厚揚げを具に入れたりするのは日本人には新しい発見だ。クィティオはカンブチア料理の中でも最もポピュラーで、ビーフンの五目ソバというところである。これでは少々足りないのをお好み焼きとロールを注文した。お好み焼きは厚目のクレープに豚肉やほしえび、もやしなどの具を包んだものである。生のもやしはカンブチア人の大好物だ。これにかけるソースも酸味があっておいしい。ベトナムのニョクマム(魚醤油=しょっつるのようなもの)をベースにしている。ロールは生の春巻の皮(上新粉で作る)に生野菜や豚肉、えび、ビーフンを包んだものである。青じそがニョクマムにととてもよく合っている。東南アジア料理にはなくてはならないあのパクチー(中国芹)が材料に見当たらないが、慣れないと日本人にはなかなか食べられない代物だからだろう。以外においしかったのはさつまいも入りカレーだ。甘みと辛み(とびきり辛い)が混ざりあってかなりいける。最後に出てきたのがカボチャのケーキである。カボチャの種を取り除いたあとにカスタードクリームを入れ、蒸し上げている。

小田急線沿線はカンブチアからの定住者も多いので土・日にはかなり混みあうが、ほとんどは男のお客である。「もっともっとカンブチアの人に来てもらいたい。特に女の人に来てもらいたい。女の方は子供がいるから外に出にくいかもしれないけれど、私たちが子守りをするからゆっくり食事ができるし」。実はセタリンさんにも2才になるモニカちゃんという女の子がいる。モニカとはカンブチア語で原石を宝石にする人という意味だそうだ。

* 焼ソバ、お好み焼 580円 カレー 650円

Dear, My Friend

出会ったこと、思うこと

考えさせられた本、映画……について

原稿、お待ちしております（1000字ぐらい）

浜野さんの手紙に答えて

柴田久史

55号で浜野さんの提起したさまざまな問題は、JVCのメンバーみんなが直面し、葛藤する問題です。以下、彼女の問いかけに対する明確な答えにはなっていないかもしれませんが、私なりの経験を踏まえ、考えた事を述べてみます。

1982年6月から約半年間タイにおいて、私は、JMT（日本医療チーム）の調整員として、外科病棟で働いておりました。病棟に運ばれる患者の多くは、女性、子供、老人でしたが、中には兵士も含まれていました。ここで兵士を治療すれば、彼は国境へ帰り再び銃を取るでしょう。では、兵士は治療せず、彼を黙って放置すればよいのでしょうか。もっといえば、兵士を支えているのは、その家族であり、戦争が長期化すれば、そこで生まれる子供達は、兵士の予備軍であります。そういった意味では、戦争時における援助活動は、医療だけではなく、母子を対象とした食料配給や補助給食活動など全て、戦争を長びかせ、状況を固定化している1つの要因になるかもしれません。東西対立という大きな構造の中で、また、戦争という名のもとで、切り捨てられようとする人々の生きる権利や、最も弱い立場に置かれている人の側に立ち、その被害を守る、というのは、声を大にして打ち出していい、私達JVCの活動の明確な目的なのではないでしょうか。

私達の生きる現代は、世界に東西対立があり、実際に私達は西側の国に生きています。西側にも東側にも加担したくないからといって、東西陣営どちらにも巻き込まれない所で生活することはできません。私達の活動の目的の一つは、西側が正しい、東側が正しい、という相互の論理のもとに、相対する側を、武力を使ってでも、たたきつぶしてしまえば、良い社会が生まれる、と考えている権力に対する、一般市民の低抗運動なのです。

タイでの活動を終え、私は、アフリカのソマリアへ赴きました。そこで私が最初に直面したのは、援

助する者、される者という構図ではなく、互いに異なった自然、文化、習慣を持った者の出会いであり、衝突でした。イスラムの民、遊牧の民、そして、半砂漠の乾燥しきった大地と、仏教や儒教の影響下にある私、農耕文化を持った私、木に覆われた湿潤気候に住む私（ソマリアへ行く前は、こうした自分さえも意識していませんでした）との日々の葛藤でした。（人間てなんて違うんだろうか）という実感でした。2年間のソマリア滞在で最も苦しんだのは、違った文化、価値感を認め、その違いを認めた上で、共に農業を営んでいくということでした。

確かに、クメールの人々は、我々と似た文化、習慣、自然環境を持っていて、葛藤は少ないかもしれませんが。また、援助活動をするには、高い技術を持っていた方がいいとは思いますが。しかし、もしそれが目的となった時、私達の活動の意味はなくなります。難民と呼ばれる人々と精神的共感を失い、機械的に付き合い、関ったメンバーが何も学んでいないのなら、引き揚げてもいいのではないのでしょうか。私が東京で仕事をしていて最も知りたいのは、直接かかわっている人達がクメールの人々と何を語っているのか、何に共感しているのか、ということです。前述したことが伝わってこないの、タイJVCは活気がない、と言ったのです。プロジェクトの運営は見えて来ますが、そこで生活し、葛藤し、生きている人々（クメールの人々だけでなく、JVCのメンバーも含めて）の顔が見えて来ないのです。私が今回浜野さんの手紙に関心を持ったのは、現場で葛藤し、悩んでいる浜野さんの顔が見えたからです。互いに友人となり、問題を、悩みを共有した時、援助し、援助される者、という関係が、対等な人間対人間の関係に近づいて行くと思います。

この浜野さんの手紙を機に、T/Eを読んで下さる方と共に、私達JVCのメンバーが抱えている悩み、問題を考え、明日への行動の出発点にしたいと思えます。ソマリア、エチオピア、タイに滞在しているJVCのメンバーで、浜野さんの手紙と、私の、浜野さんへの手紙を読んだメンバーは、関っている人々の声を、そして、みんなが抱えている問題や悩み、共感したことを、どんどん東京へ伝えて下さい（そ

れを載せるために、マンネリ化したプロジェクト報告書なんか、時々止めてしまったも構いません。) T/Eの編集長は、UNHCRのつまらない月刊誌、『REFUGEES』の日本語訳を載せるのを止め、現場の声をどんどん載せる。T/Eを読んだ会員や購読者の方々はどんどんT/Eに投稿し、文句を言い、共に悩み、苦しみ、共感する。それを読んだ現場のメンバーが反論し、あるいは、良かったところをプロジェクトに取り入れる。そうしてこそ、JVC全体が活性化し、強いては、難民問題や、南北問題により深く食い込むことができ、私たち日本人が抱えている諸問題を解決する1つの突破口が開かれることになるのではないのでしょうか。

“会費納入のお願い”をもらって

山下 仁

僕はいろいろな理由からJVCの会費を払わずにいました。ところがT/Eはいつもどおりきちんきちんと送られてきます。「さすがJVC、専従の人にボーナスの出るだけのことはある。太っ腹！」とほくそえんでいた折も折、53号のT/Eに「会費納入のお願い」という岩崎さんの手紙が同封されていました。僕はこの手紙にすっかりあきれ返ってしまいました。

まず第一に、「支援」という言葉。僕は会費によってJVCを支援しているわけではありません。支援という言葉があてはまるとすれば、それは難民を支援できたらなあ、という気持ちを表現する時であって、誰がJVCなど支援したいと思うでしょう。もしもJVCが実体のない活動体でなく、組織的な団体であったとしても、ここではせめて「協力」ぐらいのことばを使ってほしかったと思います。それとも会員という名のボランティアがアフリカやタイに勇敢に立ち向かっているボランティアの人に「協力」するなんていうのはおこがましいことなのでしょうか。「支援」ということばにもそうしたボランティア間の格差が感じられますが、このことを決定づけたのは、きっと「会員制」という制度で、僕の希望とすれば、こんなものは早く中止してしまった方がいいと思います。

もう一つ、もっと驚いたのは次の文章です。「JVCは、確たる理念に裏づけられた具体的な活動を一つひとつ続けていくことが重要であります」。現在

進行形で書かれていますが、この主語は確かにJVCです。ここでいうJVCとは何なのか、それから「確たる理念」とは何なのかをはっきりさせてほしいと思います。具体的にいうならば、僕の関係している日本語家庭教師グループは、この「確たる理念」を持っていません。もちろん、こうしたことを知らない人がJVCの代表であること事体、皮肉っぽくておもしろいと思いますが。では、JVCの活動に裏づけられるべき「確たる理念」を重要視するJVCは、そうした「確たる理念」を持っているのでしょうか。もしそうした「確たる理念」を岩崎さん個人ではなく、JVCが持っているとしたら、そこでいうJVCをはっきり規定して下さい。そしてその確たる理念をきちんと文章にして下さい。これは冗談ではありません。しかも僕の知る限り、専従の人たちの中にもそうした統一的な理念などなく、「JVCは活動体である」という人がいます。僕は個人的には嘘をつくことはいけないことだ、などとはいいませんが、もしも、「JVCは確たる……」の文が嘘だとするならば、いろいろなことを考え合わせて「JVCは嘘をつきつつ、心ある人からお金をもらって難民を助けるという名のもとで活動する」ことが逆説的な「確たる理念」であるといわざるを得ません。そうではないと信じたから、JVCの規定と、その全体的な「確たる理念」を要求するのです。さもなくば、潔くあれは嘘でしたと行って下さい。

ボランティア活動はその性質上、逆説に満ち満ちています。おそらく「広い視野」から見れば、「構造的に」搾取の還元でしかあり得ないものがボランティア活動であり、「豊か」な日本であってこそ可能なものなのでしょう。しかも援助と逆差別は常に背中合わせです。だからこそ、たとえいかに、ブームになろうとも巧言を弄して「会員集め」をすべきではないと思います。そして「確たる理念」を明確にするため、少なくとも今いる会員全員にもう一度呼びかけてほしいものです。(あるいは会員以外の人たちにも)。JVCとは何なのか。その理念とは何なのかを。

こういうこと自体、本当はボランティア同士が話し合うものなのでしょう。でも、会員というレッテルは、そうしたことを限りなく不可能へと導いているように思います。ともあれ、今後あのような手紙を他の同志に出すことはおやめ下さい。「会費、まだみたいよ」ぐらいの方がよっぽどいい。

JVCプロジェクト

1985年12月25日 現在

| 活動地名 | 活動内容 | 出資団体 | 担当者 |
|-----------------------------|--|---|---|
| 東京本部 | <p>渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。</p> <p>機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行</p> <p>JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3日曜日 午後1時～4時</p> <p>勉強会———第4月曜日 午後6時～9時</p> | <p>全国社会福祉協議会 UNHCR</p> | <p>岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 熊岡路矢, 高塚政生 佐々木志保, 荻野美智子 前川昌代, 佐久間典子 柴田久史, 他15人</p> |
| 日本国内 | <p>●日本語家庭教師</p> <p>東京, 埼玉, 神奈川, 千葉, 山梨に定住している難民の家庭を訪問して日本語及び生活の指導。神奈川県大和市の日本語教室は, 10月中旬より始まった第4期を続けている。3年目の活動の評価を行なうために, 12月いっぱいボランティア募集を休止している。</p> <p>インドシナ以外のイラン, アフガニスタン難民も対象に活動している。機関誌の『そんぽっと』(クメール語で「手紙」の意)を毎月発行している。</p> | <p>(財)アジア福祉教育財団・難民事業本部 神奈川県福祉部 禅林寺</p> | <p>森山久寿子 地区連絡係11人 他約70人</p> |
| | <p>*バザー, ハンディクラフト販売</p> | | <p>関田鶴子 他約20人</p> |
| ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) | <p>●農業による自立促進</p> <p>ほとんどの農民がとうもろこしを中心に種蒔きを行った。農民が灌漑ポンプのディーゼル代の半額を負担した。このことは, 彼等が自立するための第1歩であろう。</p> <p>ユニット4では5haの畑に種を蒔き, 残りの農地の整備もすすんでいる。新たな50haの農場拡張のための土地の調査がはじまった。</p> <p>●補助給食/基礎医療</p> <p>マグドーIIの新給食センターで補助給食活動がはじまった。対象は体重が必要体重の70%に満たない子供と, 妊産婦である。難民保健局(RHU)と協力して, コレラ調査のため検便を行った。</p> <p>●医療施設建設</p> <p>プロブルディでの医療施設建設が燃料不足のため, 工事の進行が遅れている。スタッフの宿舎の建設も平行して進められている。</p> | <p>UNHCR レフュジーズ・インターナショナル 朝日新聞厚生文化事業団 仏国土をつくろう会 創価学会 ジャパン・タイムズ 九段ライオンズクラブ 秋田大学「アフリカ難民を助ける会」</p> | <p>税田芳三(ソマリア事務所長), 山口誠史, 掛村均 高橋一馬, 米澤聡 久保祐輔, 柿原建三 千田悦子, 鶴田三芳 中川正憲, 荻ノ迫善六 モハメッド・アデン・モハメッド, シアッド・モハメッド・ムザール, ラシッド・モハメッド・ランガーレ, サディック・モハメッド・アリ, モハメッド・ハジ・ヌール, ジョニー・バークマン 嶋紀晶, 樫田秀樹 中路美和子, 石井弘代 現地スタッフ16人</p> |
| エチオピア アジバール (ウォロ州) | <p>●緊急医療/入院患者への治療のための給食</p> <p>入院患者数 約80人 外来患者数 約120～150人</p> <p>現存の医療活動はこの1月をめぐりに終了する予定だが新プロジェクトへ転化するため現在模索中。</p> <p>●林, 内山田を中心に来年度の「総合的復興促進プロジェクト」(5haの農地, 30haの植林, 灌漑用の貯水池, 基礎的開発教育)の視察, 計画立案のため, エチオピア政府(RRC), 地区行政官, 農業協同組合と交渉している。</p> | <p>朝日新聞厚生文化事業団 立正佼成会 神奈川県ユニセフ・エチオピア CRDA BAND-AID 西本願寺</p> | <p>本田徹, 内山田康 林達雄, 木内敦夫, 工藤美美子, 福村州馬 加納妙, 内藤のぞみ 山科司 現地スタッフ約60人</p> |

| 活動内容 | 活動内容 | 出資団体 | 担当者 |
|----------------------------------|---|--|---|
| バンコク事務所 | 涉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報、バザー等。 季刊『ニュース・レター』（英語・タイ語）発行 | 全国社会福祉協議会 一般寄付 | 佐藤正喜（バンコク事務所長）、中山清秋 ボンピモン・チャイブーン カモン・ミンムアン 斎藤美香代 他約10人 |
| カオイダン （カンブチア 難民キャンプ） | ●西崎憲司記念技術学校 モーターバイク、自動車、(1シリンダーエンジン)の整備と溶接の技術訓練を実施している。 居住者登録がされていない約7200人に食糧配給が開始され、彼らは隣接のサイト7に移動中。 | UNHCR レフュジーズ・インターナショナル 妙心寺派宗務所 花園会 | 古西 勇、熊木政江 トンディー・ソムカネ ソムヨット・ラタナタム |
| タイ・カンボジア 国境 （カンブチア 難民村） | ●レントゲン移動診療 移動レントゲン車による、難民村及びタイ被災村の巡回レントゲン診療。 バンブー村、サイト2、サイト6にて活動中、活動対象者は4651人。 | WFP/UNBRO 日本青年会議所 関東地区医療部会、城西病院 西本願寺 結城青年会議所 | クリアクライ・プティヤビブン スラ・プロムチャン ヴィジョン |
| | ●補助給食 緊張が続いているが、まだ昨年のような直接的な攻撃はない。UNBROは、現在のサイト2よりタイ国内に近いサイト3を避難地として用意している。 | WFP/UNBRO | マーシャ・イシイ 浜野敏子 トンチャイ・クラタルムボン 蓮尾慶治、仲田奈々子 カオエッティ・スリホン カヌエンニット・ソーンマユラ ソムサック・ウィアンヤンクン サムエン・メオンベット |
| パナニコム （第三国定住待ち 難民一次収容施設） | ●文化オリエンテーション ①日本語の日常会話の習得 ②日本に関する概略的な情報伝達 ③日本へ行くまでの手続き等の理解を深める | 天理教千葉 | 浜崎妙子、菊池早江子 ティアン・パントゥー |
| 地域開発 | ●バンコク市内のスラム地区 奨学金援助：スラム地区定住児童のための学費援助 図書館：6区にあるバンコク市の青少年センターの一角を借り受け活動中。 建材提供：スラム立ち退き者、あるいはスラム内に保育所等を建設する際の物資援助 ☆活動の記録用などに使用するための、フラッシュ内蔵の35mm小型カメラを譲って下さい。 | モロロジーMIRC NTV、JO FIC 庭野平和財団 YMCA横浜 聖ヨゼフ老人ホーム | ヴェラナット・ドゥアンウドム 加藤哲也 サムルエイ・ジョンヨークラン アルニー・プロマ ウティパン・ラタナタリー |
| カンブチア （ブノンベン） | ●ワークショップ 1980年以降、国連および西側諸団体から寄付された、救援と復興のための輸送トラック（日本製、英国製）の多くが故障したまま放置されている。これらのトラックを修理し困窮の状態にある農村への物資供給を円滑にすると共に、技術者を育成することに協力する。 | （協力団体） ユニセフ・ブノンベン事務所 | 熊岡路矢、簗田健一 |
| 人材派遣プロジェクト | | | |
| フィリピン （パターン・プロセス シング・センター） | ●国際移民委員会（ICM）—第三国定住手続きにともなう医療業務 | 城西病院 | 青井千恵 |

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行います。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円 団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶機関誌「Trial & Error」のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係

②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所

(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (12月小計 456,209円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. インドシナ難民救援募金 (12月小計 68,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- C. カンプチア募金 (12月小計 20,000円) カンプチア国内の復興のために使われます。
- D. クロントイ・スラム募金 (12月小計 910,452円) バンコクのクロントイ・スラム内の図書館の運営およびスラム立退き者のための建築資材購入費に使われます。
- E. テッグ・スラム奨学金募金 (12月小計 135,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- F. 日本語家庭教師募金 (12月小計 414,000円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- G. 医療募金 (12月小計 0円) 緊急事態が発生した場合、速やかに医師を派遣したり、医薬品などの緊急救援物資を輸送するために使われます。
- H. ボランティア募金 (12月小計 75,300円) 現場で活動続けるボランティアの健康管理費にあてられます。
- I. JVC運営経費募金 (12月小計 17,000円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. 無指定募金 (12月小計 337,445円)

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

東京9-27495(募金種目名をご記入下さい。)

加入者名—JVC東京事務所

編集後記

▶JVCのような小さな組織(世間から見ればあまりにもおぼつかないものであるが)でも設立されてから6年も経ってしまうと、自分のやっていることの全体像がつかめなくなったり、仕事として誰かにやらされているのではないかと思うような人も出てくる。しかし私たちの活動は決して上意下達ではない。心身ともに疲れ果ててしまうようなミーティングの討論を重ねてすべてが決定される。自分の意見を持たなければねとばされる厳しさはあるが、逆に誰でも意見を述べる事ができる。ぜひ多くの人に定例ミーティングに参加してほしいと思う。(ミーティングの日時は毎週変わるのでオフィスに問い合わせ下さい)



昭和61年1月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代

発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所

〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階

☎03(834)2388 Telex:2323187 JVCHQ J

バンコク事務所 JVC THAILAND

67 South Sathorn Road

Bangkok, THAILAND

☎(286) 4857

Telex:87032 COMSERV TH

ソマリア事務所 JVC SOMALIA

c/o UNHCR P.O. Box 2925

Mogadish, SOMALIA

Telex:794 HICOMREF SM

エチオピア事務所 JVC ETHIOPIA

c/o Embassy of Japan P.O. Box

5650 Addis Ababa, ETHIOPIA

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

*本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共 300円